

# 『宇治拾遺物語』における進行態表現形式

## 「〜キル」「〜テキル」について

高橋敬一

### 一 はじめに

柳田征司氏は、御論文「近代語の進行態・既然態表現」（『近代語研究』第八集 武蔵野書院 一九九〇年）において、日本語のアスペクト表現の歴史的な変遷の大略をたいへん要領よくまとめておられる。

その中で、氏は、中央語（文献）の進行態表現形式（本稿では、以下「キル系表現」を中心に考察するので、先行文献等のまとめも、それを中心に行なう）の変遷について、「キル」（古代）↓「キル・テキル」（中古）↓「テキル」（中世室町）という経路を経て、現代語の形式へと展開したことを論じられた。

さて、この表現形式の変遷の中で一つだけ注目しておきたいことがある。それは、古代語（中古）から近代語（中世鎌倉）に至るまで、進行態表現形式として「〜キル」と「〜テキル」の二形式が併存していたということである。このことに関連して、氏は「〜キル」形式の進行態表現への進出は指摘なさっておられるのであるが、この形式が「〜キル」形式と併存しえた理由については、明確には述べておられないように思う。

【宇治拾遺物語】における進行態表現形式「〜キル」「〜テキル」について

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「〜キル」「〜テキル」について

尚、「〜キル」形式が、中世になって消滅した原因については、音声上の問題（「同一母音の連続」）と文法上の問題（「補助動詞としての独立性」）の二点が考えられるのではないかということ指摘なさっておられる。

本稿では、中世期成立の説話集『宇治拾遺物語』を資料として、進行態表現形式として「〜キル」と「〜テキル」が併存している実態を報告し、既然態表現形式としての「〜キル」「〜テキル」との関係視野に入れながら、主として、これらの形式に上接している動詞の分析を通して、両形式の相違点・類似点ということを用法の面から考察してみたい。つまり、これらの形式は、当然、アスペクト表現と深いかわりを持つものではあるがすべてではなく、そこには、各動詞が本来持っている性質がかかわっている、と考えられるからである。<sup>(1)</sup>

ところで、「〜キル」「〜テキル」の問題を考える場合には、まず、古代語の進行態・既然態表現形式「〜ヲリ」「〜テヲリ」との関係を検討すべきかと考えるのであるが、『宇治拾遺物語』においては、「〜ヲリ」（六例）、「〜テヲリ」（二例）は用例が少なく、ほぼ、「〜キル」「〜テキル」専用と言ってよい状況にあるので、「キル系表現」を中心に考察することとした。<sup>(2)</sup>

テキストは、「無刊記古活字本」（岩波『古典文学大系』二七・小学館『古典文学全集』二八）を用い、適宜、「陽明文庫本」（岩波『新古典文学大系』四二）および「宮内庁書陵部蔵写本二冊本」（『笠間影印叢刊』四六）と校合せることとする。<sup>(3)</sup>

## 二 「〜キル」「〜テキル」に上接する動詞について

『宇治拾遺物語』における補助動詞「〜キル」および「〜テキル」の用例数は、次の通りである。尚、本動詞「キ

ル」の用例数は九八例である。

「くキル」

七九例

動詞連用形＋キタリ

五六例

動詞連用形＋キ（サセ給ヒ）テ

一七例（二例）

動詞連用形＋キ（給ヒ）ヌ

三例（二例）

動詞連用形＋キ（ラレ）ケリ

一例（二例）

動詞連用形＋キテ（侍リ）

一例（二例）

動詞連用形＋キ（給へ）リ

一例（二例）

「くテキル」

五一例

動詞連用形＋テキタリ

四六例

動詞連用形＋テキ（給ヒ）テ

二例（二例）

動詞連用形＋テキヌ

二例

動詞連用形＋テキ（給へ）リ

一例（二例）

これらは、時の表現に関わる下接語（助動詞「タリ・リ・ヌ・ケリ」）および助詞「テ」によって、二つの形式を分類したものである。両形式は、型の上から見ても大変よく似ている事がわかる。「くキル」形式中の、「南泉坊と

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「くキル」「くテキル」について

いふ所に、こもりゐられけり」(序)、「この隣なるめらはの、くそまりるへくほまりるくて侍るを、・・うちふせて」(第二七話)の二例(二種類)の型が、「くテキル」形式の方に見当たらないだけで、その他は一致している。

次に、「くキル」および「くテキル」に上接する動詞を、それぞれ(A)「動作作用を表わす動詞」および(B)「心理的活動を表わす動詞」に分類して、掲げてみる(あいいうえお順)。尚、「くキル」の用例中に○印を付した動詞は、「くテキル」のそれと重複するものであることを示す。

「くキル」

(A) 「動作作用を表わす動詞」(三〇語)

○集まる 洗ふ 出づ 入る(三例) 踞(うづくま)る(二例) 起く 置く 落つ 下  
 (お)る(四例) 屈(かが)まる(四例) 屈む ○隠る ○帰る(二例) 食ふ 籠る  
 (七例) 叩く 立つ 約まる 集ふ 止まる(二例) 並(な)む ○並らぶ(二例)  
 眠(ねぶ)る(二例) 上る 待つ(八例) 守る 排泄(ま)る ○向ふ(四例) 寄る  
 居並(ゐな)む

(B) 「心理的活動を表わす動詞」(九語)

○言ふ(四例) 窺ふ ○思ふ(七例) 泣く 嘆く 念ず(三例) ○申す 見る(二例)  
 ○物語す(二例)

「くテキル」

(A) 「動作作用を表わす動詞」(三四語)

集まる 抱く 打懸く 打被(かづ)く 打取る 起き立つ 行なふ 押し取る 掻い  
屈まる 抱ふ 掛く 隠る 畏まる 帰る 差し当つ 為果(しおほ)す 装束す す  
(五例) 揃ふ 反らす 立つ 作る 並ぶ 退(の)く 登る 掃く 吐く 引  
き廻す(二例) 跪く 開く 参る 持てなす 物忌す 向ふ

(B) 「心理的活動を表わす動詞」(一一語)

呆れる 言ふ 打惚(ほう)く 拝み入る 思ふ(三例) 差し覗く 唱ふ 念じ入る 申  
す 物語す 笑ふ

二つの形式に共通する動詞をみると、それらは、「集まる・言ふ・思ふ・隠る・帰る・並らぶ・申す・向ふ」など、一般に用例数も多く、基本的な語である。このことと、「くキル」および「くテキル」のアスペクトが、どのようにかかわるのか注目してみたい。

また、「くキル」「くテキル」に上接する動詞群を、「動作作用を表わす動詞」と「心理的活動を表わす動詞」とに分類してみると、右のようになる。

尚、「心理的活動を表わす動詞」を特にとりたてた理由は、現代語においてアスペクトの観点からみると、他の動詞とは異なつた特徴を示すことによる。

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「〜キル」「〜テキル」について

	「〜キル」	「〜テキル」
動作作用を表わす動詞	三〇語	三四語
心理的活動を表わす動詞	九語	一一語

ここでも、この二つの形式の類似性が十分窺われるのであるが、「心理的活動を表わす動詞」に付いた「〜キル」および「〜テキル」が、どのようなアスペクトを示すか注目してみたい。

### 三 同一動詞に付いた「〜キル」「〜テキル」について

『宇治拾遺物語』において、同一動詞が付いた「〜キル」および「〜テキル」の間で、いわゆるアスペクトの相違（一応、ここでは「進行態」か「既然態」かの相違をいう）は認められないのかということについて、考察してみる。用例は、次の通りである。尚、各用例に付した番号は、(1)(2)・・は「〜キル」形式、①②・・は「〜テキル」形式の用例であることを示す。

「集まる」

- (1) あつまりゐたる鬼ども、あさみ興ず（第三話）

- ① あつまりてゐて、・・・」といひあへり（第一八話）

二つの形式の間に相違は、認めがたい。ともに「既然態」と考えられる。

「言ふ」

- (1) 「をそしをそし」といひゐたる程に、・・・もてきたり（第二三話）  
(2) なにとなく聲だかにもいひゐたりけるを、・・・左府きかせ給ひて（第七二話）  
(3) 「・・・今はほろびんもくるしからず」といひゐたり（第一一〇話）  
(4) 国ごとにいひゐたりける事を、人ききて（第二二〇話）  
① 「・・・いま起給なん」といひて居たり（第一九四話）

用例(1)(2)(3)(4)は「進行態」、①は「既然態」と考えられる。ただし、①の例は、段落末尾に位置し、他の例とは状況が異なる。

「思ふ」

- (1) あらくいらへなんぞとおもひゐるほどに、「・・・」とななる（第二七話）  
(2) 又それを思居たる程に、よりもこで過ぎていぬ（第二七話）  
(3) わびしと思ひゐるほどに、・・・たすけられて（第五七話）  
(4) よもむなしくはやまじと思ひゐるほどに、・・・とらせたれば（第九六話）

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「〜キル」「〜テキル」について

- (5) 物あらばとらせてましと思ひるたるほどに、夜うちふけて (第一〇八話)
- (6) いかなることにかと思ひたるほどに、杖にすがりてあゆむ (第一三六話)
- (7) 受戒すべきよし思ひたる所に、おほせくだしければ (第一三九話)
- ① 浅ましと思ひたる程に、人あまたぐしていできたり (第一七話)
- ② 大官司、われはと思ひたるを、国司とがめて (第四六話)
- ③ はづかしと思ひたるに、幕引きまはしてゐぬ (第一〇八話)

二つの形式の間に、相違は認めがたい。すべて「進行態」と考えられる。

「隠る」

- (1) かたやぶにかくれて見れば、おはしましたり (第六四話)
- ① かくれてゐたりける程に、ののしりさはぐ (第一五五話)

二つの形式の間に、相違は認めがたい。ともに「既然態」と考えられる。

「帰る」

- (1) 立る僧は帰るたりとみる程に、又るたる僧うせぬ (第一三七話)
- (2) くはしくをしへければ、有つる居所に帰る給ぬ (第一七〇話)
- ① もとの山の坊にかへりてゐたる程に、「・・・」といふ人あり (第八八話)



二つの形式の間に、相違は認めがたい。ともに「既然態」と考えられる。

〔並ぶ〕

- (1) 上達部は南殿にならびる、殿上人は弓場殿に立てみるに (第二〇話)
  - (2) かくしだいしだいの司ども、次第にみなならび居たり (第一一九話)
  - ① まさゆきにならびてゐたるに、・・・といふ (第一一〇話)
- 二つの形式の間に、相違は認めがたい。ともに「既然態」と考えられる。

〔申す〕

- (1) 観音にむかひ奉て、なくなく申ゐたる程に、夢にみるやう (第一〇八話)
  - ① 仏の御前に念仏申てゐたるに、空にこゑありて、告て云 (第一六九話)
- 二つの形式の間に、相違は認めがたい。ともに「進行態」と考えられる。

〔向ふ〕

- (1) むかひゐて、・・・物くひはつるまではありけり (第二五話)
- (2) うるはしく向ゐて、・・・粥をすすらすれば (第二五話)
- (3) いかにと思てむかひゐたるほどに、・・・ゐられたり (第七八話)

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「くキル」「くテキル」について

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「〜キル」「〜テキル」について

- (4) それをとりて、向<sup>レ</sup>むたるたうじん、・・・うちにいりぬ (第一八〇話)
  - ① 弟子どもに念仏もろともに申させて、西にむかひてゐたり (第一六九話)
- 二つの形式の間に、相違は認めがたい。ともに「既然態」と考えられる。

「物語す」

- (1) 「殿にあるやうは」など、物<sup>レ</sup>がたりしむたり (第五七話)
  - (2) 物<sup>レ</sup>がたりしむたりける程に、・・・氷魚の一、ふといでたりければ (第七九話)
  - ① 物語<sup>レ</sup>してゐたる程に、人々あまたこゑしてくなり (第一六五話)
- 二つの形式の間に、相違は認めがたい。ともに「進行態」と考えられる。

以上、上接する動詞が同一という条件の用例を、前後の文脈等から判断して、それぞれが、「進行態」(「上接動詞」の表わす動作そのものが継続中であるもの)と定義して用いる)か、「既然態」(「上接動詞」の表わす動作そのものは一度終了し、その状態が継続中であるもの)と定義して用いる)かに分けてみた。結果は、次の通りである。

「進行態」

「言ふ」「〜キル」のみ「思ふ」「申す」「物語す」

「既然態」

「集まる」「言ふ」「〜テキル」のみ「隠る」「帰る」「並ぶ」「向ふ」

ここで、進行態表現形式としての「〜キル」「〜テキル」の相違ということに注目してみると、「言ふ」「思ふ」「申す」「物語す」という「心理的活動を表わす動詞」に付いた場合、「〜キル」「〜テキル」両形式ともに「進行態」を表わしていることに気づく。ただし、「言ふ」の例は、同じ性質の動詞であるが、「〜キル」(「言ふ」(1)(2)(3)(4)は、明らかに「進行態」と判断できるが、「〜テキル」(「言ふ」①)の場合は、前述のようにやはり「既然態」として見ておいたほうが良いように思う。このようなところに、「〜キル」進行態、「〜テキル」既然態という、両形式が本来持っている基本的な性格が現われているのではないかと考える。

このことは、「〜テキル」の用例中の「笑ふ」の、次の場合にも言えると思う。

○此府生とりて、笑てゐたりけるとか(第一八九話の最末尾部分)

その他、「〜キル」に、「既然態」を表わす場合があることも注目されるのであるが、これは、上接する動詞(「集まる・隠る・帰る・並ぶ・向ふ」)が動作の「過程」を表わす動詞であるという動詞の性格に因るものであると考えられる。

ところで、以上みてきたように、進行態表現形式としての「〜キル」「〜テキル」に、はっきりとした、用法上の相違点が認めがたいとすれば、両形式の使い分けは、何に因るのであるか。たとえば、「思ふ」「向ふ」の例にみられるように、同じ条件の下で、「〜キル」が「〜テキル」の用例数をはるかに上まわっていることなど考えると、作者の文体(表現志向)というようなことも、考慮しなければならぬかも知れない。『宇治拾遺物語』は、進行態表現形式としては「〜キル」を志向する傾向が窺われる。

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「〜キル」「〜テキル」について

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「〜キル」「〜テキル」について

#### 四 進行態表現形式としての「〜テキル」について

『宇治拾遺物語』には、「〜テキル」の用例が全部で五一例存する。これらの用例を、「進行態」、「既然態」に分類してみると、次のようになる。併せて、「〜キル」七九例も分類しておく。

「〜テキル」

「〜キル」

「進行態」

一一例

四四例

「既然態」

四〇例

三五例

ここで、「〜テキル」進行態の用例をすべて掲げてみる。ただし、前に示した「思ふ」三例、「申す」一例、「物語す」一例は除く。

「打惚く」

① 博打の打ほうけてゐたるがみて・・・といへば（第一六話）

「唱ふ」

① 不動の咒をとなへてゐたるに・・・人々の聲あまたしてくるをとす也（第一七話）

「差し覗く」

① なが屋ののきに、孤のさしのぞきてゐたるを、利仁にみつけて（第一八話）

「呆れる」

① をんやうじ、心得ず仰天して、・・・祓ひせきする人も、あきれて居たり（第一〇四話）

「拝み入る」

① 孔子、そのうしろをみて、・・・さほの音せぬまで、おがみ入りてゐ給へり（第九〇話）

「念じ入る」

① 「・・・恥見せ給な」と念じ入てゐたる程に、・・・物を受けて帰りぬ（第一七二話）

このように、はっきりと進行態表現形式と認められる「くテキル」の条件を検討してみると、「打惚く」「唱ふ」「差し覗く」「呆れる」「拝み入る」「念じ入る」、そして、前の「思ふ」「申す」「物語す」のように上接する動詞に共通性が認められ、すべて「心理的活動を表わす動詞」である。

ところで、「唱ふ」①の例は、（注二）で示したように「陽明文庫本」では「くキル」である。これは、進行態表現形式としての「くキル」の古さを窺わせるものであるかもしれない。

最後に、「くキル」の中、「心理的活動を表わす動詞」を上接する場合について、考察しておく。用例は、次の通りである。前に示した「言ふ」「思ふ」「申す」「物語す」の例は除く。

「窺ふ」

① うかがひるたれば、すずめどもあつまりて食にきたれば（第四八話）

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「くキル」「くテキル」について

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「くキル」「くテキル」について

「泣く」

- ① すべきやうもなくて、つぼねにかへりて、なき居たり（第二七話）

「嘆く」

- ① わがおやたちいかにおはせんと、かたがたになげきるたり（第二一九話）

「念ず」

- ① つづけかきたれば、二日三日まではねんじゐたる程に（第七六話）

- ② ねんじゐたる程に、・頭もたげておきんとしければ（第九六話）

「見る」

- ① とく夜のあけよかしと思てみるたれば、・明がたになりぬ（第一〇一話）

- ② かく参りたるをだに、よしよしとみるたるをしも、めしあれば（第一九一話）

このように、すべて「進行態」となり、アスペクト表現と動詞とのかかわりの強さを示す結果となった。

尚、「くキル」進行態の上接動詞は、右の他には、「あらふ（洗）」「くふ（食）」「たたく（叩）」「ねぶる（眠）」  
二例、「まつ（待）」「八例、「まもる（守）」である。

## 五 ま と め

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式としての「くキル」と「くテキル」との用法の違いは、どこにあるのか

と言うことを明らかにすべく、この稿を起こした。

結論としては、上接する動詞を、「動作作用を表わす動詞」と「心理的活動を表わす動詞」の二つに分けて、アスペクトを分析してみると、前者の動詞群に付く場合は「既然態」および「進行態」（「〜キル」の場合のみ）、後者の動詞群に付く場合は「進行態」になることが分かった。特に、「〜テキル」進行態の確実な用例は、すべて上接する動詞が「心理的活動を表わす動詞」であるということが注目される。

ただし、進行態表現形式としての両形式の用法上の相違は未だ判然としない面がある。両形式の中の、どちらを用いるかの選択基準に、作者の文体志向というようなことも考えられるのではないかということも述べた。

#### 注

(1) 次のような論文を参考にした。

・野村雅昭「近代語における既然態の表現について」(『佐伯博士古希記念国語学論集』表現社 一九六九)

・坪井美樹「近世のテイルとテアル」(『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社 一九七六)

・金水 敏「人を主語とする存在表現——天草版平家物語を中心に——」(『国語と国文学』一九八二・一二)

同 「上代・中古のキルとヲリ——状態化形式の推移——」(『国語学』一三四 一九八三・九)

同 「いる」「おる」「ある」——存在表現の歴史と方言——」(『ユリイカ』一九八四・一一)

・柳田征司「近代語「テアル」」(『愛媛国文と教育』一九八七・一二)

・山下和弘「「テナイル」と「テナアル」」(『語文研究』六五 一九八八・六)

・岡野幸夫「平安時代和文における「〜る」(居)」に関する一考察」(『山口国文』一五 一九九二・三)

(2) 「〜ヲリ」および「〜テヲリ」の例は、次の通りである。

「〜ヲリ」

○ひらがりをるを、・・・虎・・・陸さまになげあぐれば(三九話)

○たゞ老をかうけにて、いらへおる(一一一話)

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「〜キル」「〜テキル」について

『宇治拾遺物語』における進行態表現形式「〜ヤル」「〜テヤル」について

○なに事いひおるふる大君ぞ（一二〇話）

○をよびをさしなど、かたりをれば（一二二話）

○いとゞくるふやうにして、かたりをる（一二三話）

○火を高くともして、かくれおるへかくれたるゝかとみよ（二七六話）

「〜テヲリ」

○かくていられんとしておるなり（七話）

○わびし、心うしと思て、つらづえつきておりける（四〇話）

(3) 本稿において、特に問題となると思われるのは、次の二箇所である。それらはいずれも、「陽明文庫本」のみ「〜ヤル」となっている。

○不動の咒をとなへてゐたるに……（二七話）

○心しづかに軍そろへてゐたるに……（二二八話）